

スペイン語圏を知る本（その22）

岸野 久著

『ザビエルの同伴者アンジロー 戦国時代の国際人』

（吉川弘文館、2001年刊）

評者 坂東 省次

鹿児島市山下町のザビエル公園には、鹿児島が日欧交渉史上きわめて重要な役割を果たしたことを物語る3つの銅像が立っている。1549年8月15日に鹿児島に上陸して日本に初めてキリスト教を伝えたフランシスコ・ザビエル、サビエル来日の契機となったアンジロー、そしてザビエル来日が契機となって日本人最初の留学生としてヨーロッパに渡ったベルナルドの銅像である。なかでもアンジローの銅像は1999年のザビエル来日450周年を記念してようやく建立されたものである。「ザビエル来日450周年を機にアンジローも評価しようという機運が人々の間に高まってきたことを物語っている。」日本におけるザビエル研究の第一人者、岸野久氏の言葉である。

岸野氏自身、数少ない先行研究のなかでアンジローがマイナスイメージで捉えられてきたことからアンジロー像再検討の必要性を強く感じ、自身の四半世紀におよぶ国内外での文献・現地調査の成果に基づいて、ザビエル来日の実現に大きな役割を果たしたアンジローの実像に迫ったのが、本書『ザビエルの同伴者アンジロー 戦国時代の国際人』である。

著者の考えをまとめると、アンジローとは、1511年もしくは1512年に鹿児島に生まれた。職業は貿易商人であった。ある理由によって人を殺し、ポルトガル商人ジョルジュ・アルパレスの船で1546年か47年に日本を脱出して、47年初めにマラッカに到着した。同年12月初旬のある日（多分7日）、同地の「丘の聖母教会」でザビエルと運命的な出会いをした。長い間懊悩していた殺人の罪をザビエルに告白し、罪の許しを得て、心の重荷から解放されたアンジローは生きる力を与えられ、学習意欲を燃やした。聖パウロ学院で信者となるための教理教育を十分受けて、1548年5月20日聖霊降誕の祝日にゴアの大聖堂で洗礼を受けた。洗礼名はパウロ・デ・サンタ・フェであった。

キリスト教の布教を目的にアジアに派遣された

ザビエルであったが、遅々として進まぬ布教を前に絶望の境地にあった。そんな時に出会ったのが、アンジローであった。ザビエルはアンジローの知的好奇心と理性的な態度のなかに典型的な日本人像を認め、日本訪問を決意するのであった。

アンジローは水先案内人としてザビエル一行とともに故郷鹿児島に帰国した。一行は官民挙げての熱烈な歓迎を受けた。人を殺めて海外へ逃亡したアンジローは、国際語ポルトガル語を操り、海外通の国際人パウロに変身していた。「お尋ね者」から一転して、「時の人」となった。

しかし、それも束の間、およそ1年後、鹿児島が禁教方針に転じたのを機にザビエルは鹿児島を去り、アンジローは再度故郷を出奔することを余儀なくされた。その後、中国で殺害されたといわれるが、アンジローの行方は定かでない。アンジローの晩年は時の人から一転して悲劇の人となったが、岸野氏はアンジローをこう評価している。

「日本人最初のキリスト教徒となったアンジローはザビエルの日本開教・キリスト教伝来の端緒となり、イエズス会の仏教研究に貢献した。」

「アンジローはポルトガル語を話し、読み書きした最初の日本人、欧文から日本語への翻訳者・通訳の第1号、ヨーロッパ文化・文明を享受し日本情報をヨーロッパへ発信した最初の日本人留学生である。」

「アンジローは旺盛な好奇心の持ち主で、新しい環境に対処しうる柔軟さ・適応力、日本社会、文化、宗教などについて説明できるだけの知識を持ち、自分の考えを筋道を立てて論理的に話すことができた。意思疎通のできる程度の語学力を持っていた。」

最後に、筆者は、本書をこう言って締めくくっている。

「21世紀において日本社会の国際化はますます進むことであろう。このような時代にマラッカでザビエルと堂々と議論し、ゴア留学では所定の学業を修め、鹿児島ではザビエルの右腕として活躍した、戦国時代の国際人アンジローから学ぶものは多い。」と。

ばんどう しょうじ（教授・スペイン語学）